

【New Poetry House 田誌】
 たまねぎ詩の鑑賞会
 The Poetry With Noname
 奇数月の第二日曜日、定期開催
 ひろひとろの
 詩への想いを大切に。



◇ 2011/11/13 (Sun)

秋田県現代詩人協会主催「秋田の詩祭NONAME・詩表現を楽しむ集い」の方へ遊びに行かせて頂きました。平塚鈴子さんの朗読「森を離れて」がとっても印象的でした。ふっと優しい気持ちになる詩。目を閉じて、ふわり広がっていく世界を感じられる、朗読って素敵だなあ。オカリナやギターによる演奏と詩とのコラボもありました♪ ギター演奏は、今号から会員となられた小笠原和成さん。小笠原さんの歌も聴けたり…盛り沢山なお祭りらしい一日！ ほかに、宮沢賢治にまつわる講演もありました。

◇ 2012/01/08 (Sun)

新年最初の開催！ 参加人数は少なかったけれど…そのぶん(?)一編一編を深く味わえました。中でも、木村さんが紹介してくれた「たまねぎ」は面

うれしがらせてもくれる。
 地味な着物のたまねぎは
 人生の味を変えてくれる
 ふとった農家のおばさん。



て、さらに一回盛り上がり… また鈴木さんの詩が読みたくなって豆本を手にしたのは私だけじゃない筈。大雪に見舞われた冬、雪かきの苦労はさておいて「肩先に降りた雪の囁き」と題し、めいめいの弦きをつなぐワークショップで楽しみ、閉会。

五人で鑑賞した詩のタイトルは…
 ・懐かれし子よ
 ・たまねぎ

白かった！ ユーモアたっぷり、愛情たっぷり。じゅくりじゅくり鉛色になるまで考えちゃってる作者ってどんな人？ みんなの中で膨らむタマネギ世界！

「たまねぎ」

作者？

台所でいつも欲しがられ
 ととても便利な
 たまねぎだが
 時々バナナをうらやむ
 大喜びの子供たちが
 得意になってむく
 あの香りよい一枚の皮
 対照的に
 皮は意地悪く分厚く重ね
 甘い実は奥に隠している
 一枚むいて目がしみて
 一枚むいて頭が痛くなり
 もう一枚もう一枚
 ただ涙があふれるばかり
 甘い実などは
 どこに隠れているのか
 むいて刻んで
 水にさらして布で絞ると
 高血圧にいいといわれる
 おいしいサラダに。
 鉛色にいためる
 シチューもカレーも
 驚くほどのコクが出る。
 辛くだけと思われるが
 手を加えると思事に変身
 泣かせるだけかと思えば

・口をきかない子供
 ・夢遊病者のロマンセ
 ・何もなければ
 ・全体に並ぶ
 ・風の宅急便

◇ 2012/03/11 (Sun)

大きすぎる悲しみと、今なお続く大変な被害をもたらしたあの日からちょうど一年。震災に直結する詩も持ち寄りられました。
 あきた文学資料館の一室で黙祷を捧げました。集まったみんなの顔を、しみじみ見渡してしまいました。いかに生きるのか？ 詩も揺れたんだと思う。誰しもが考えさせられただろう、一年。
 震災前・震災後という比較もあります。ひとつの詩を、より深く感じたり、新たな解釈に気付かされることもあったのではないのでしょうか。
 文字として定着した詩が時を越え、そして変容する。同様に、私たちの何かもまた否応なしに変化せざるをえなかった。自身が紡ぐ詩も、変化したい。

* 「舟」から、一編の詩が紹介されました。
 静かに自身と向き合っている様子なのに、その声が激しくも感じられます。

「生きるということ」
自分自身になるということ

作者？

生きるということは私が私自身になるということ
私はまだ私自身になっていない

私が私自身になるということはどういうことだろう
遠いのは

私も
あなたも
自分自身になっていないから

私はなぜ生きているのだろうか
時々考えることがある
あなたもたまに思うときがあるだろう

私は私自身になれるように
私が私自身になるように

それが世界にとって必要なことであるはずならば

私も
あなたも
自分自身になることがなによりも大事なこと

私はまだ私自身になっていない

生きるということ
私が私自身に
自分自身に
なるということ

この声の主は『名も無き詩の鑑賞会』へも足を運んで

下さったことのある熱海一樹さん。

五月、彼の地で開かれた朗読会に参加した日のことを思い出します。『名も無き詩の鑑賞会』の自家ともいえる岩手県滝沢村『僕らの理由』では、避難生活を送る人も集い、ここ秋田とは違う厳しい視線もありました。震災から日が浅かったこともあって、朗読会の後に交わされる言葉にも胸がヒリヒリしました。その日の私は、私に私の言葉がないことを悔しいと感じました。

この詩に触れて、私が私自身になったとき、はじめて自然に誰かのために何かが出来たり、モノが言えるようになるんだと改めて思いました。

*

一年が巡ったこの日。

今日は特別な一日だけど、他にも様々な節目があって、それぞれが毎日、それぞれに何かと向き合っている。

以前誌上交流させて頂いた、由利高校文芸部顧問の中川先生から嬉しいお便りがありました。

元々が女子校だった由利高文芸部は一時、部員がゼロの休部状態に陥ってしまったんだそう。なんと今回、初の男子部員・齋藤駿さん、齋藤龍之介さん、加藤剣一さんの一年生三名が入部し、活動を再開！ “分科会でレクチャーしてくださった講師の先生と、高校統廃合により廃部となる大曲農業高校の三年生女子部員に、今年度中に自分たちの部誌を届ける!!” という男の約束を果た

すため部誌を発行！”されたのだそうです。文芸部のみなさん、中川先生、おめでとうございます!!

思いがギョーッと詰まった重みある一冊。詩・小説・随想と、それぞれが選び取った方法で、表現を楽しんでいます。ピュアな言葉で綴られる齋藤龍之介さんの詩に素朴な強さを感じます。齋藤駿さんの小説は今風のライトノベル。書く楽しさを素直に感じさせてくれます。加藤剣一さんの随想にはビックリ！よく調べられ緻密に裏付けされた背景、記されている文字が余計なものを削ぎ落とした芯のよう。震災の記録ともいえる特集も組みまれ、読み応え充分でバラエティもありました。

新たな出発を祝うかのように、部誌の名前も「光跡」と改められました。本当にうれしい一冊から齋藤龍之介さんの詩を二編紹介します。



秋田県立由利高等学校文芸部

「稲穂のありがとう」
愛情をたくさん受けた金の稲穂
春から秋へ実を結び

大きく大きく育っていく
そして稲穂はお礼をいう
育ててくれてありがとう
礼儀正しく頭を下げて

「ひとすじの光」

今まで出会った人たちが
わたしの未来を切り開いてくれた
立ち止まった私の背中を押してくれた
今の自分は自分であって自分じゃない
みんなの優しさの結晶なんだ
みんながほくに与えてくれた
ひとすじの光をありがとう

二編の詩は、ひとつの詩のように響き合っています。
ひとすじの光、は文芸部のこのよう☆

巻頭言と題して、最初の頁には「現在地／とりあえず
右次左／地図は要らない／道は探さず」の一文が…。
うゝん、そっだよね!!

七人で鑑賞した詩のタイトルは…
・秋
・冬は冬だ
・ひとつでいい
・稲穂のありがとう
・静まりの詩を聴く
・人が遠く僕も遠く
・生きるということ
・自分自身になるということ

